分散キャンパスにおける留学生の心理

—PAC分析を用いた信州大学でのCase Study—

佐　藤　友　則

1．はじめに

信州大学は，他の大学に類を見ない，広い地域にわたる分散キャンパスを持つ大学である。4つの町に5つのキャンパスが点在しており，それぞれの町の間には，松本を中心にそれぞれ車で1時間ほどの距離がある。また工学部・教育学部の在する長野市から農学部のある南箕輪村までは，高速を用いても車で2時間弱の時間を要する。この「分散キャンパス」を，信州大学の独自性と考え，より有効に生かしていこうという努力が行われているが，多くの困難な問題を生じさせていることも事実である。

本稿では，この信州大学の「分散キャンパス」に着目し，このことが留学生の心理にどのような影響を与えているかについて調査することにした。これまで，信州大学の留学生全体，またはそれぞれのキャンパスの留学生を対象にした意識調査やアンケートなどは行われてきたが，「分散キャンパスにおける心理」について各キャンパスで調査を行い，全体としてまとめた例は見られない。また，今回は多人数を対象にしたアンケート調査ではなく，各キャンパス1人ずつの留学生に対するインタビュー調査を，PAC分析の手法を用いて行った。これらのケーススタディにより，信州大学の分散キャンパスに所属する留学生全体の傾向が明らかになるわけではない。しかし，個々の留学生の内面に深く入っていくことにより，それぞれのキャンパスの状況，抱える問題点などが散見されてくるのではないかと考える。それらをふまえて，信州大学の留学生環境改善のための提言をしていきたい。

2．研究の方法

2－1．調査の方法

分散キャンパスにおける留学生の心理を分析するために，PAC分析を行った。PACとは，Personal Attitude Construct：個人別態度構造のことであり，社会心理学などの分野で用いられている。以下に，本研究でのPAC分析の手順を示す。

①被験者に，他のキャンパスから離れた場所で生活・勉強していることについて，どう感じているかについて訊ね，自由に連想される項目をカードに書かせた。

②カードに書かれた項目を，重要な順に並べ替えさせた。

③重要度No.1のカードとNo.2のカードを見て，2つの項目が直感的にどれくらい近いか遠いかを7段階で評価させ，距離行列表に記入させた。続けてNo.1とNo.3，No.1とNo.4というように評価を進め，同様の手順で全カード間の距離を評価させた。

④作成された距離行列表をもとに，ノートPCでクラスター分析を行い，結果を視覚的に表示するデンドログラムを得た。

⑤デンドログラムを被験者に提示し，それぞれのグループについてどのように考えるか，

インタビューを行った。

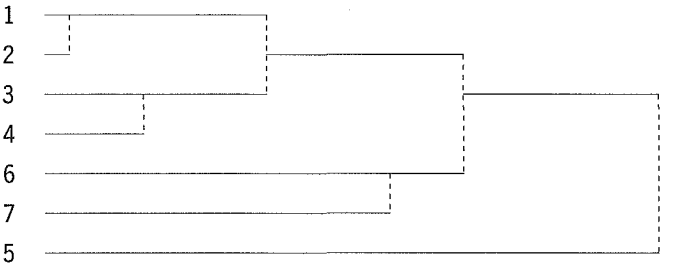
2－2．被験者

被験者は，4つの町のキャンパスから1名ずつ選出した。選出の基準は，当該キャンパスでの生活・勉強を始めて2年以上経過していること，留学生同士，または日本人との交流関係を持っていること（引きこもり状態になっていない）である。当該キャンパスの状況をよく知り，その上で通常の人間関係も持って生活・勉強している留学生でなければ，当該キャンパスへの適切な評価は難しいと考えて選出した。なお，この調査は各キャンパスの情報開示を目的とするものではないので，キャンパス名をあげることは差し控える。

3．調査の結果

3－1．調査結果　被験者A

被験者Aは，当該キャンパスに来て2年半ほど経過している。Aに対する調査は，2001年3月8日にファミリーレストランを利用して行った。ノートPCを持ち込んでの長時間の調査であったが，特に支障なく進行した。所要時間は2時間半ほどであった。以下にAのデンドログラムをあげる。



1「信用できる人が少ない」	グループ1
2「内緒で相談できる人はなかなかいない」	〃
3「松本とのつながりが全然ない」	グループ2
4「他のキャンパスの学生や他大学の学生と会う機会が少ない」	〃
6「パーティーなどの面白いことはあまりない」	グループ3
7「小さい町に住んでいる」	〃
5「いろいろ納得できない決まりがある」	グループ4

Aは，7つの項目をあげた。この7項目によるデンドログラムは，大きく4つのグループに分けられた。項目1，2，からなるグループ1と，項目3，4からなるグループ2，項目6，7からなるグループ3および項目5単独で構成されるグループ4の4つである。

グループ1についてAは，「常に心に深くある考えだ」と答えた。重要度№1と№2を含むことからも，このグループの重要性が分かる。また，デンドログラムから見て，この2項目は最も近い関係にあることが分かる。他人を信用できず，相談しにくいことを意識して暮らさなければならず，そのことが強く生活・研究面を規制しているとのことである。これにより，信頼できるアドバイザーがおらず，何かを誰かに相談すると，すぐにそのことがキャ

ンパス内の教職員や学生に知られてしまう，精神的に落ち着かない状況がうかがえる。このグループ１は「精神面の不安」と名づけられる。

グループ２は，松本キャンパスを含めた外界との交流に関するものである。「信州大学の他の学部をほとんど見たことがない」と話していたように，自分の学部だけで孤立しているという印象を持っている。しかし「普段はそれほど意識していない」とも話しており，重要度も３，４であるように，グループ１ほどの重要性はない。このグループ２は「孤立感」とする。

グループ３は，都会ではない地域での活気のない生活についてのものである。このことも Aの生活に影響を与えている。特に，東京での生活経験を持っているため，それと比較して不満を感じていると述べていた。また，「日本人との交流もあまり多くない」とのことである。しかし重要度は高くなく，日頃意識しているものでもないとのことだった。このグループは「活気のなさ」と名づけられる。

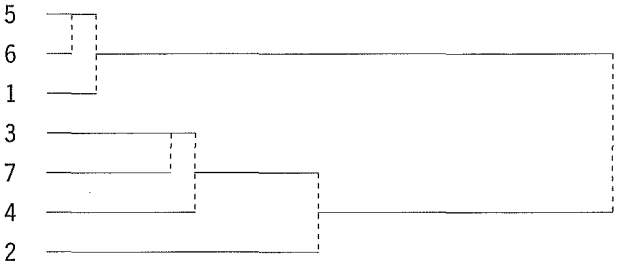
グループ４は単独だが，重要度ではグループ３を上回っており，Aも，「他とは異なる質のものだが重要である」と話していた。これは，研究室内での，意味がない強制的な慣習についてのものである。特に，実権を持つ一部教官の強い要求によるものが多いとのことだった。外国人であっても日本全体の一般的な慣習であれば従うが，狭い範囲での強制的な慣習，特に必要性を感じない慣習・ルールについては反発を感じると述べていた。このグループ３は「無用な締め付けへの反発」とする。

さらに，デンドログラム全体を見て述べられた意見は，「来日当初の他の街での生活は，とても楽しく充実していた。それ以降は，学位をとるまでの我慢の生活」というものである。信州大学に来てからの状況に満足できず，学位を取って早く帰国することを望むとしていた。また，「来日して間もないうちに，日本人との交流に関わる重要な日本事情を教えてもらいたい」とも述べていた。例をあげると，先生とのお酒の席での振舞い方，お世話になった後でのお礼の仕方などである。これを知らなかったがために，小さな誤解を生じさせたが，知っていればそれもなかったとのことである。入学前予備教育での，日本事情教育の改善が望まれる。

Aの調査結果をみると，「精神面での不安」「疎外感」「活気の無さ」「無用な締め付けへの反発」など，今までの，そして現在の生活に対する抑圧された不満を多く抱えていることがうかがえる。実際，それぞれの項目について，＋か－か０のイメージを聞いたところ，全て－であると答えた。２年半在籍して，上記のような印象を強く持つようになったということは，それだけ改善すべき点が多くあるということを示唆している。

３－２．調査結果　被験者Ｂ

被験者Ｂは，当該キャンパスで約３年の生活・勉強経験を持っている。Ｂに対する調査は，2001年３月15日に行った。所要時間は２時間ほどだった。



5「留学生にとっては，松本より人間関係がいい」	グループ1
6「留学生が少ない」	〃
1「以前からの知人がいる」	〃
3「勉強しやすい環境」	グループ2
7「日本人との交流が多く，親切だと感じる」	〃
4「先生たちがやさしい」	〃
2「大都会より物価が安く生活しやすい」	グループ3

Bも7項目の自由連想を書いた。Bは，このデンドログラムを3つのグループに分けた。項目5，6，1からなるグループ1と項目3，7，4のグループ2と，項目2単独のグループ3である。

まずグループ1では，デンドログラムを見ても項目5と6が特に近い関係となっているが，Bは，項目6の「留学生の少なさのために，日本人との人間関係・留学生同士の人間関係がよくなっている」と述べた。松本では留学生数が多かったために，一人一人の留学生に日本人の配慮が行き届いていなかったが，こちらでは行き届いているとのことである。また，このキャンパスでは，部局が主体となって，留学生と地域の日本人との交流に取り組んでいるという経緯がある。このことも，この意見に大きく貢献していると言えよう。また，大学入学前からの「知人がいる」こともあり，人間関係に恵まれて生活しているようである。このグループ1は「人間関係の良さ」と名づけられる。

グループ2でも，人間関係が関わってくるが，少し大きな自分をとりまく環境全般について述べている。研究設備や自然環境，親しみやすい先生等を肯定的に評価している。自国では，先生と酒を飲むなど考えられないとのことで，このグループ2は「恵まれた環境」とする。

グループ3は，物価の安さについてであり，「留学生にとってはとても重要なことだ」と述べている。実際に重要度は2番目であり，大都会での生活も経験しているBは，このことの重要性について強調していた。このグループ3は「生活のしやすさ」とする。

上記の3つのグループは，ともに重要度が高いものと低いものを含んでおり，どのグループが特に重要であるとは言えない。Bにとっては，どれも必要不可欠なものであろう。

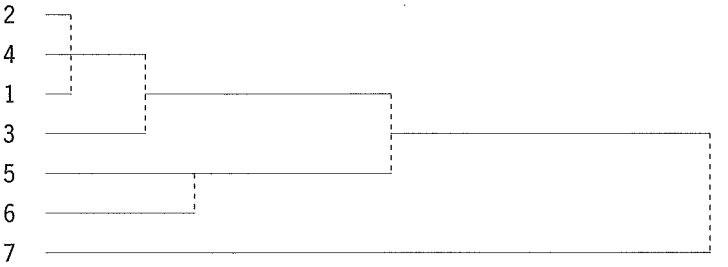
まとめると，「人間関係の良さ」「恵まれた環境」「生活のしやすさ」と，Bは3年間過ごしてきた当該キャンパスの状況を非常に高く評価していることが分かる。＋，－イメージを聞いても1，2，4，7が＋で，残りは0イメージであった。留学生が少ないことで奨学金を受給しやすいことも，高い評価につながっている。もっとも「相談した内容がすぐに広ま

ってしまう」とインタビューで答えていたように，Aと共通した不安を持っている面もあるが「秘密自体がそれほど多くない」とのことで，あまり深刻には考えていないようである。

3－3．調査結果　被験者C

被験者Cは当該キャンパスに来て5年経過している。Cに対する調査は，2001年3月29日に行った。場所は，A，Bと同様にファミリーレストランで，所要時間は2時間ほどである。

以下に，Cのデンドログラムをあげる。



2「新しい環境に慣れなければならなかった。授業も松本よりずっと大変」　グループ1
4「こちらに来て，とても忙しくなった。授業についていくのが精一杯だった」
〃
1「入学した時と全く同じような苦労をした」　〃
3「寮に入るのも留学生にとっては壁だった」　〃
5「ここでの留学生の集まりは魅力がない」　グループ2
6「松本の留学生仲間とのつながりが，時間とともに薄くなっていった」　〃
7「松本キャンパスとの関係がなく，全く別の学校という気がする」　グループ3

Cも，A・Bと同じく7項目をあげた。このデンドログラムは，項目2，4，1，3のグループ1，項目5，6からなるグループ2，項目7単独のグループ3の3つのグループに分けられる。

グループ1は，重要度№1から№3の項目を含み，項目間の関係も非常に強い，最も重要なグループである。これは，当該キャンパス移動当初の感想であり，入学した時と同様の苦労を味わったことを訴えていた。共通教育の授業は楽しかったが，当該キャンパスでの授業は急激にレベルが上がるなど，その意味でも新しいスタートだったとのことである。さらに項目3の，寮での生活も大変だったとのことである。松本の国際交流会館から日本人主体の寮に移動し，寮独特の慣習などを強制されたことが，大きなプレッシャーになったとのことである。グループ1の大変さに寮生活での大変さも加わり，特に苦しかったと述べていた。このグループは「苦しい再スタート」と名づけることができる。

グループ2は，松本キャンパスと当該キャンパスとのつながりに起因するものである。松本での生活は，留学生も多く楽しいこともあったが，こちらでは急に数が減り，活気がない。そのため，留学生同士の集まりがあっても魅力を感じず，行っても面白くなかったため行かなくなってしまったとのことである。この集まりがうまく機能していれば，グループ1の救いにもなっただろうとしている。また，松本にいる留学生の友人とは，Cが松本に行かなけ

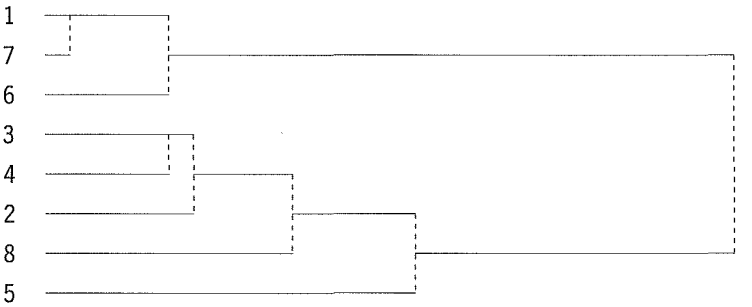
ればつながりが薄くなってしまうと述べていた。松本には留学生が多いため，どうしてもあちらがメインという印象が強く，松本から当該キャンパスに友人が来ることは稀だった。Cも，2年生のうちは松本での行事に参加するようにしていたが，3年生以上になると行かなくなったとのことである。このようにして，留学生同士の絆も薄くなっていってしまうようである。さらに，当該キャンパスは大学院生も多く，松本での生活を知らない留学生が多い。そのギャップは，キャンパス内で集まる際には障害になっていたとのことである。このグループ2は「留学生間のつながりの薄さ」と名づけられる。

グループ3は「松本キャンパスとの関係がなく，全く別の学校という気がする」というものだが，これはキャンパス間のつながりの薄さについてのものである。松本キャンパスには，ほとんど行く用事がなく必要性もない。そのため，当該キャンパスで生活していると「松本キャンパスは別の学校」という意識が強くなっていくとのことである。その意識は，松本キャンパスを全然知らない大学院生と付き合ううちに，さらに強くなっていく。このグループは「松本との隔絶感」とする。

Cの調査結果をまとめると，「苦しい再スタート」「留学生間のつながりの薄さ」「松本との隔絶感」と否定的な名前が多く，特に信州大学が全体でのまとまりに欠けているため，留学生もバラバラになってしまうという指摘が多いことに気づく。＋，－評価でも項目5，6，7の0評価を除き，残りは全て－評価である。Cは，松本での生活を思い出しながら，現在の状況のみでなく，信州大学を取り巻く環境全体について述べていた。その意味でも，この調査結果には意味が大きいと考える。

3－4．調査結果　被験者D

被験者Dは，松本キャンパスで勉強・生活している留学生である。松本キャンパスでの生活を始めて3年ほどになる。Dへの調査は，2001年4月5日に，本調査者の研究室で1時間40分ほどの時間をかけて行われた。



1「会館を離れればバラバラ」	グループ1
7「接したことがない人にはこれからも接するチャンスがない」	〃
6「学生がグループ化している」	〃
3「テスト期間，図書館が込んでいる」	グループ2
4「相談できる人が多い」	〃
2「研究にはよい」	〃
8「にぎやか」	グループ3

5「不自由」　グループ4

被験者Dは8項目をあげた。この8項目は4つのグループに分けられる。項目1，7，6からなるグループ1と項目3，4，2のグループ2，項目8と項目5単独のグループ3と4である。

グループ1は，留学生間での一体感についての項目が並ぶ。項目1に関しては「松本キャンパス内であっても，松本以外のキャンパス同様，国際交流会館を出てしまうとバラバラになる。そのバラバラ度は，他のキャンパスと松本市内とそれほど差がないのではないか」と述べていた。また，会館を離れた後は，大学主催のイベントなども少ないので接するチャンスがなく，学校→アルバイト→家というパターンが確立し，新しく知り合う機会がないとのことである。また，会館を出て1，2ヵ月後に寂しさを感じるようになり，本当に気の合う仲間とだけ付き合ってグループ化していくと述べていた。このグループを，「会館を軸にした一体感の喪失」と名づける。

グループ2は，松本キャンパスの勉強・研究環境に関するものである。「松本はメイン・キャンパスであるため人が多く，テスト期間は図書館の席がない。しかし逆に，図書館に行けば誰かを見つけて相談できる」と述べていた。相談内容は，勉強・生活両面についてであり，相談相手は，留学生の友人が最も多く，日本人の友人と留学生担当の先生がそれに次ぐ。とにかく，誰かにすぐ相談できるとしていた。上記のような環境があるため，項目2「研究にはよい」につながるようである。このグループ2は「恵まれた学習環境」とする。

グループ3の「にぎやか」については，「いろんな人がここに来て，去っていく移動の場所。他のキャンパスは静かだと聞いた」と述べていた。松本が信州大学のメインのキャンパスだという意識が強く，他のキャンパスの学生が遊びに来るが，こちらからは行かないとも言っていた。被験者Cとも共通する認識である。分散キャンパスの中でも，松本が核になっているという意識は，留学生の間にも強いようである。このグループは「松本キャンパス中核意識」と名づけられる。

グループ4の「不自由」は，今回の分散キャンパスに関する調査とは異質のものだが，留学生の意識を規定している重要なものである。日本社会全体が無意識のうちに要求している様々な規制に対し「しばられていて不自由だ」と感じているとのことである。うわべだけの言葉や，言外に要求されていること等，外国人にとっては困難なことが多くあると述べていた。このグループは，「日本社会での不自由さ」と名づける。

Dの調査をまとめると，松本キャンパスでの生活について，「会館を軸にした一体感の喪失」「恵まれた学習環境」「松本キャンパス中核意識」など，＋面も－面もあると捉えているようである。＋－イメージを見ても，＋が項目4，2，－が項目1，7，5で残りは0イメージというように，ほぼ半々である。一方，今回の調査の目的から考えると，Dの結果のうち，グループ3「松本キャンパス中核意識」が持つ意味は大きい。他のキャンパスには行かず，向こうから来るものだという意識は，おそらく松本キャンパスの多くの学生（日本人・留学生を問わず）が持っているものであり，その意識が他キャンパスの学生に，知らず知らずのうちに劣等感を植え付けている可能性は否定できない。その結果，Cのように「時間が経つにつれて行かなくなった」という状況を招き，さらに学部間の距離を広げていく。そう

ならないための処方箋が必要であろう。

4．考察

上述してきたように，4つのキャンパスそれぞれ1名の被験者に対するPAC分析により，当該キャンパスで生活・勉強してきた留学生の心理を，ある程度浮き彫りにすることができた。次に，この4つのケースを総合して見ることにより，同じ信州大学生でありながら，離れたキャンパスで生活・勉強してきた4名からの，信州大学が抱えるこの問題への提言を述べることができる。さらにそこから，日本人からは得ることができない貴重な指摘も得られる可能性がある。

まず，この4名の自由連想で現れた項目の＋，－評価は，非常に大きく異なっている。被験者Aは－評価のみで，Bがやや＋，Cはやや－，Dはほぼ同数というようにである。今回の調査に参加した留学生は，個々の事情から自由連想をスタートさせたが，デンドログラム後のインタビューにおいては，周囲の留学生全体の状況もふまえながら答えていた。よって，上記の結果は，それぞれのキャンパスでの留学生環境の差異を現していると言っていいであろう。当然のことながら，それぞれのキャンパス，部局により，留学生に対する対応には何らかの差が見られる。そして，その差異は，すぐ近くに比較の対象とする部局がないがために，同一キャンパス内での対応の差異より大きくなる可能性がある。また，住む場所という環境の差は，当然のことながら様々な大きな差異をもたらす。4名のうち3名は，松本，または他の町から当該キャンパスが在する町への移動を経験しており，そのことがプラスに働いたか，マイナスに働いたかも留学生の心理に大きな影響を及ぼしている。このことは，留学生のみに言えることではない。在松以外の部局の日本人学生も，同様の移動，変化を体験しているのであり，同様の心理状態にあることも予測される。

次に，4名全てに共通して見られた意見ではないが，「情報がすぐに他の人に伝わってしまう」「適当な相談相手がいない」という意見があった。この意見は，信州大学の留学生全体を対象に行ったニーズ調査の際にもあげられたものであり，多くの留学生に共通した悩みと言っていいであろう。この問題も，分散キャンパスの問題と切り離しては考えられない。他の単一キャンパスの大学では，留学生センター主導の全留学生を対象とする相談体制が整っており，相談した内容が周囲に漏れて広がってしまうようなことは滅多にない。しかし，信州大学では，5つのキャンパスそれぞれで整備された相談体制はできておらず，留学生は上述したような「情報漏れ」の不安をぬぐいきれずにいる。この不安は，信州大学での生活・勉強両面に大きな不満をもたらすものであり，各キャンパスにおける信頼できうる相談体制の整備を急がなくてはならない。

さらに，被験者CおよびDの意見で注目されるものとして，松本キャンパス中核意識があげられる。この意識は，日本人教職員・学生にも見られるものだが，留学生の間にも大きく存在していることが分かった。松本にいる留学生は，他キャンパスの留学生が松本に来るものだと思い込み，他キャンパスにいる留学生は，移動当初こそ松本に通うが，日が経つにつれ縁遠くなり，やがて自分に関係のない「別の学校」という意識まで持つようになる。このような意識は，信州大学のような分散キャンパスであるために生じるものであり，単一キャンパスでは生じえない。そしてこれは，共同体として信州大学が一致して力を発揮しよう

とする際に，大きな弊害となることが予想される。このような意識を作らせないために，留学生のみならず日本人学生も，信州大学の各キャンパスを訪問しあうような体制を考えてはどうだろうか。行ったこともなく行く必要もなければ，実際の距離より遠く感じて疎遠になるのが常である。しかし，一度でも行ったことがあれば，心理的距離は格段に近くなりうる。もちろん，訪問だけのために行くのでは却って反発が強まりかねないので，日本人学生も交えた運動会などの行事を各キャンパス持ち回りで実施し，実施キャンパスへの移動は大学のバスによる等の援助をすれば，学生同士のキャンパス間移動が活発になり，心理的距離も近くなり，大学全体としての統一感も醸成されてくるのではないだろうか。

最後になるが，人間関係について述べたい。被験者Bは，松本よりも日本人との関係がいいと述べていたが，当該キャンパスでは，地域の一般の日本人と留学生との交流に力を入れており，そのことがBの好評価につながったことは想像に難くない。ところが，被験者Aは，活気がない町で日本人との交流もあまり多くないとしており，信州大学全体の留学生へのニーズ調査の結果を見ても，留学生は日本人との交流を望んでいるが，その要望が満たされていないという結果が出ている。2001年12月に177名の留学生に調査したところ，93.8%の留学生が「日本人と接触する機会をより多く持ちたい」と答えたが，「放課後や休日に食事をする」ほど親しい関係を持っている留学生は22.6%に過ぎなかった。留学生と日本人との人間関係がどのようなものかは，今後の非常に大きな留学生環境整備につながる。留学生だけを見て環境整備を考えるのではなく，日本人学生，一般の日本人と留学生との円滑な交流が可能な環境の整備が必要であろう。また，「交流」の質も問題であろう。パーティーやイベントを実施して「交流した」という時代は過去のものである。留学生は，もはやそのような「一時的な交流」には関心をもっていない。継続的で，お互いに苦労や衝突もし合うような「参加型の交流」を考えなければならないだろう。

5．今後の課題

本研究では，分散キャンパスの問題にしぼって被験者に自由連想をさせる予定でいたが，説明不足もあり，必ずしも分散キャンパスの問題に関わらない，当該キャンパスでの印象が多く連想されていた。それによって改めて見えてきたものもあるとは思うが，より対象をはっきりと提示して，自由連想がしやすい環境を作ることが必要だったと考えている。

また，被験者を各キャンパス1名ずつ選出したが，今後は，今回の被験者と出身国や所属学科，交友関係などの異なる被験者を選び，PAC分析を続けていきたい。このようなケーススタディが積み重ねられることで，当該キャンパスの状況も，信州大学の分散キャンパス全体の状況も，より正確に把握できるようになると考える。

さらに，分散キャンパスにおける留学生の状況を改善するためには，今回得たような調査結果をもとに，大学内の様々な部局で対応策を考え，実行に移していかなければいけない。問題を，それがあると指摘されただけで終わらせるのではなく，それの改善への努力を積み重ねていかなければならない。上述したような，各キャンパスにおける守秘義務を持った相談体制の確立，キャンパス持ち回りのスピーチコンテストなどの開催，日本人学生および一般の日本人との交流の拡大などは，全学レベルの協力と実施への強い意志がなければ不可能である。留学生センターとしてできる限りのことは全力で取り組みつつ，全学レベルの協力

を期待したい。

参考文献

佐藤・秋庭（2002）「第３回　信州大学の留学生のニーズ調査～2001年11月・12月調査において～」『信州大学留学生センター紀要』　第３号　pp.95-109

大河原尚（2002）「日本語教育日記の自己分析からみた内省」『世界の日本語教育』　第12号　pp.79-94

佐藤・秋庭（2001）「信州大学の留学生のニーズ調査～2000年11月・12月調査において～」『信州大学留学生センター紀要』　第２号　pp.91-102

山口和代（2001）「留学生の日本語表現と文化の影響」『世界の日本語教育』　第11号　pp.225-241

永井・徳井・牧（2000）「留学生の日本人に対する意識変化とその影響要因としての地域の役割について」『JAFSA 調査・研究助成プログラム調査・研究報告書』

内藤哲雄（2000）「留学生の孤独感の PAC 分析」『信州大学人文学部紀要』第34号　pp.15-25

藤田裕子・佐藤友則（1996）「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか　―PAC 分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究」『日本語教育』　89号　pp.13-24

渡辺文夫・才田いずみ他（1994）「日本語教育と認知的変容の研究Ⅰ　－韓国人学習者と日本人実習生の授業観についての事例的研究－」『日本語教育方法研究会誌』Vol.1　№3　pp.32-33